## 4　川田順　翁久允宛封書「拝啓　京都宛御状」（昭和十八年四月二十八日消印）

封筒　墨筆／株式會社住友本社東京支店用箋2枚　ペン書き
切手　拾七銭
消印　〔不明〕18・4・28

〔受信〕富山市桜通電氣ビル内　高志人社／翁久允様／速達
〔発信〕東京市麹町區丸ノ内一丁目二番地二　株式會社住友本社東京支店／川田順／昭和十八年四月廿八日

封筒　裏面

〔本文〕

翁久允様　　四月廿八日　於東京　川田順

拝啓　京都宛御状昨日当地にて拝受致候　実は佐々木博士の容態なおくゝむづかしく、たうとう本日まで滞在、なほ数日居りて、安心といふ処で帰宅するつもりに候。依而帰宅は五月三日比かと存候。御用事あらば御状はやはり京都の方へ御出し被下度、為念、願上候。

御作并同封御返中上候

扨、拙歌碑については不一方御手数かけ申しわけ無い心地いたし候。碑面の歌、御説の如く、鷲にても宜しと存候が、立山の鷲といふ事と、詞書もルビも無くて直ちに讀める歌でなければならずと存候　然るときは

立山に棲むとは聞きし大鷲の　まなかひにして
飛びたつを　見き

の一首が最適と愚考いたし候、依而、右の歌にするか或は「立山はあらき岩やま」にするか、毎度御迷惑乍ら、貴方にて御相談の上、いかやうにも御決定被下度願上候　草々

川田順の歌碑建立に際してのやりとりの一端がうかがわれる書簡。川田は、「鷲」の歌であれば、「立山の鷲」であることが詞書による説明やルビなどなくてもすぐにわかる歌でなければならないだろうとして、「立山に棲むとは聞きし大鷲のまなかひにして飛び立つを見き」を候補に挙げている。また、当初の候補であった「立山はあらき岩山」の歌でもよいとしている。相談の結果、歌碑には「山空を」の歌が刻まれた。歌碑建立の経緯は、小又幸井「立山歌碑譚」（『高志人』第八巻第八号、昭和十八年八月）に詳しい。本書簡は歌碑に刻む歌の選定に関する小又の文章と矛盾のない内容である。

## 5　川田順　翁久允宛葉書「拝啓　吉井勇君に」（昭和十八年八月四日消印）

郵便はがき　墨筆・ペン書き

切手　貳錢

消印　左京　１８・８・４

〔受信〕東京都大森区調布鵜ノ木／翁久允様

〔発信〕京都市北白川小倉町／川田順

〔本文〕

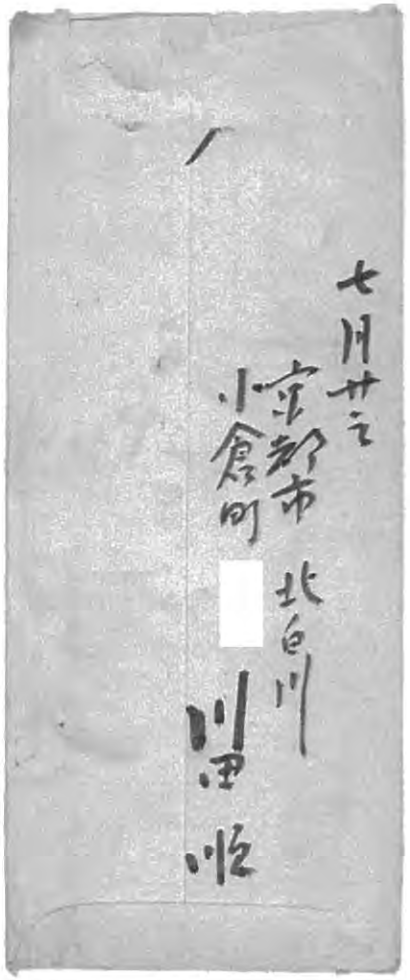
拝啓　吉井勇君にあひ候処　貴下には
今月十六・七日頃御入洛のよし、此機会に
一夕設け度候間、何卒、小生及び吉井君の為
一夕あけて下され度候、而して、昨今なかく
場所とりにくく候間、乍勝手、御都合のよき
日を御決定次第御一報被下度御願申上候、
拙宅にては初孫（女児）生れ申し候、小生も
驥尾に附して「翁」と相成候　草々

順

吉井勇から、翁久允が八月十六、十七日頃京都へ来ると聞いたので、一夕設けたいから予定を知らせてほしいと記す。また、初孫ができたので自分も「翁」になったと記している。なお、翁久允が実際に京都を訪ねたのは十月五日で、「鶴屋」にて翁、川田、吉井、石崎光瑤の四人で会食した（翁久允「愛國歌人川田順先生を訪ふ」『高志人』第八巻第十一号、昭和十八年十一月）。

## 6　川田順　翁久允宛書簡「寄翁久允学兄」（昭和二十年七月二十三日消印）

封書　墨筆／鳩居堂製便箋1枚　墨筆
切手　四捨錢
消印　〔不明〕　□・7・23
印・書き入れ　「速達」
〔受信〕（転居票貼付）雄山局行／受取人左記へ転居ス／7月24日　富山郵便局集配員／五百石町石原志げ方
〔発信〕七月廿二日／京都市北白川小倉町／川田順




封筒　裏面

〔本文〕

寄翁久允学兄

亞米利加も印度も見たる君なれば
いまの戦爭の行方を知らむ

亞米利加ゆ歸らふ途にみほとけの
足跡たどり泣きし君かも

高志の国を狭しと思ふなこの時ぞ
ふるさと人のために筆執れ

昭和乙酉晩夏　夕陽居主人（朱文方印「順」）

封筒　裏面

戦争末期に届けられた書簡。翁久允に寄せる短歌三首が記されている。アメリカとインドを実際に見てきた翁には戦争の行方は見えているだろう、この時だからこそ「ふるさと人のために筆執れ」と激励する内容。『高志』は昭和二十年六月を最後に、刊行を停止していた。戦後、昭和二十一年（一九四六）二月に『高志人』第十一巻第一号として復刊。復刊号の表紙には、川田順「新興藝術」が掲載された。

## 7　川田順　翁久允宛葉書「御懇書拝読」（昭和二十年七月三十一日消印）

郵便はがき　墨筆・ペン書き

切手　五銭

消印　左京　２０・７・３１

〔受信〕富山県中新川郡新川村沢端永井甚右衛門氏方／翁久允様

〔発信〕京都市北白川小倉町／川田順

〔本文〕

御懇書拝讀、市中より立山のふもとへ
御移りは却而安全よろしかる可く候、
「高志」当分ゆつくり、何事も白雲と共に
悠々の外無候、本日丹波市やられたら
しく小生の新歌集「吉野之落葉」も
大方灰とあきらめ申候、今更行く処
むづかしく、薄氷を踏む思ひにて洛北
にとどまり居候。　七月卅日夕

翁の疎開先について、立山の山麓はかえって安全だろうと記し、自らは、京都北白川の地に留まると記す。本文に「「高志」当分ゆつくり、何事も白雲と共に悠々の外無候、本日丹波やられたらしく小生の新歌集「吉野之落葉」も大方灰とあきらめ申候」とある。時局のため『高志』が刊行できなくなった翁を気遣う。翁は、東京の自宅から、三月末に滑川、四月に雄山町沢新、六月中旬に沢端へと疎開先を移った。なお、川田の原稿は空襲を免れ、『吉野之落葉』は昭和二十年八月、奈良県丹波市町の養徳社から刊行された。

## 8　川田順　翁久允宛葉書「玉葉拝受全く御同感」（昭和二十年八月二十六日消印）

郵便はがき　墨筆・ペン書き

切手　五銭

消印　〔不明〕　20・8・26

〔受信〕富山県中新川郡新川澤端／翁久允様

〔発信〕京都市北白川小倉町／八月廿五日／川田順

〔本文〕

玉葉拝受、全く御同感に候。
只、不心得の者多くして、歴史を汚し
たること、くれぐも悲痛に不堪候。
ミロク菩薩の出現、日本人の出直し、
先づこの外は無之候。」銀河君の追悼
会など御企ての節は一寸御報被下度
願上候。　草々

終戦の感慨を記す。また、八月二日未明の富山空襲で負傷し落命した藻谷銀河について、追悼会の計画があれば知らせてほしいと記す。

## 10　川田順　翁久允宛葉書「拝復御状縷々忝く」（昭和二十一年九月二十一日消印）

郵便はがき　墨筆・ペン書き
切手　五銭三枚
消印　左京　21・9・21
〔受信〕富山市荒町高志人社／翁久允様
〔発信〕京都市北白川小倉町／九・二〇／川田順
〔本文〕

拝復御状縷々忝く拝見仕候、小生めづらしく秋
風を引いて数日臥床の為、御返事延引仕候」　銀河
君法要十月十三日のこと敬承、もとより参列し度
く存候も、最初鉄道について訊き候ても、北陸線は常
に超満員との事、又小生の知人富山にまゐり途中、
終に閉口して米原に下車致候、こんな事では老骨とても
覚束なく候、とにかく十月十三日御決行被下度候、
その日に迫りて、幸いに乗れさうでしたらまゐるべく候間、
無駄の御手数かけ相すまず候へども、十三日にどこに
下車し、先づどこへ御尋ねすべきかを御一報被下度候。
小生東宮御用にて廿四日発上京、月末にはかへり候

藻谷銀河の法要が十月十三日に執り行われるとの知らせに対し、参列したいが北陸線が常に超満員のため、参列できるかわからないが、まずは、どの駅で降り、どこを訪ねればよいか教えてほしいと記す。戦後の鉄道は、昭和二十三年頃まで主要路線の旅客輸送が定員の三倍から四倍の過密状態であったという（国土交通省ウエブサイト「日本鉄道史」参照）。なお、十月十三日、藻谷銀河の追悼歌会は富山市西別院で開催されたが、川田は参列していない（『高志人』第十一巻第十一号、昭和二十一年十一月）。

## 12　川田順　翁久允宛葉書「賀正　つぐなひを」（昭和二十二年一月一日付）

郵便はがき　墨筆・ペン書き

切手　拾五錢

消印　左京　□・1・1

〔受信〕富山市荒町高志人社／翁久允様

〔発信〕京都市北白川小倉町／川田順

〔本文〕

賀正

つぐなひを未だ足らず
と省みて　寒き初日の
光に　むかふ

丁亥元旦

順

昭和二十二年の年賀状。短歌が記されている。

## 13　川田順　翁久允宛葉書「冠省　春寒なほ去らず」（三月二十五日付）

郵便はがき　墨筆・ペン書き

切手　五銭・拾銭

消印　〔不鮮明〕

〔受信〕富山市荒町高志人社／翁久允様

〔発信〕京都市北白川小倉町／三・二五／川田順

〔本文〕

冠省　春寒なほ去らず老骨
閉口いたし居候　扨
石崎光瑶画伯三度目の脳溢血
にて今朝六時半長逝致され候
実に残念至極に候、高野山金剛峯
寺の襖画遂に未完成に了り候。
三月廿五日夕　　川田生

日本画家の石崎光瑶の訃報を伝える。「三度目の脳溢血にて今朝六時半長逝致され候。実に残念至極に候。高野山金剛峯寺の襖画遂に未完成に了り候」と記す。石崎は昭和二十二年三月二十五日逝去。川田は、昭和十八年十月五日、京都の「鶴屋」での会食の際に、翁を介して、翁と同郷の石崎と初めて会った（翁久允「愛國歌人川田順先生を訪ふ」『高志人』第八巻第十一号、昭和十八年十一月）。

## 14　川田順　翁久允宛葉書「高志人毎号忝く」（昭和二十五年十一月十六日消印）

郵便はがき　墨筆
切手　二円
消印　神奈川国府津・25・11・16
〔受信〕富山市新桜町観光会館内高志人社／翁久允様
〔発信〕神奈川縣国府津／一一・一五／川田順
〔本文〕
高志人毎号忝く
十一月号巻頭
平和？自由？　　十一月十六日
実に痛快、　　〔淡彩水仙図〕
何人も、貴兄ならで　　順
は斯く正直に公　　〔白文方印「掬泉居」〕
言し得ず
十字軍に加はることを許されぬず
我等のいのち　全けからむか、呵々

『高志人』受け取りの礼状。翁久允「平和？自由？」（『高志人』第十五巻第十一号、昭和二十五年十一月）について、「何人も貴兄ならでは斯く正直に公言し得ず」と記し、「十字軍に加はることを許されず我等のいのち全けからむか」と短歌を記す。葉書には川田自身による水仙の彩色画が添えられ、「掬泉居」の落款がある。翁は『高志人』を継続して川田に送っていた。なお、翁久允「平和？自由？」は、本文末尾に「今日の世界は自由と平和を偶像化しようとする印刷文化時代だ」と記し、「高遠なる理想が偶像化されたら、それは如何に高遠であつても、そして如何に眞らしく説法されても、更らに如何に美はしく塗りたてられても、何の値もないものになるのである。やがて自由・平和への十字軍と称するものが第三次大戦の火蓋をきることが明らかである」と結ぶ。

## 16　川田順　翁久允宛葉書「玉葉及高志人忝く」（昭和三十年三月十七日消印）

郵便はがき　墨筆・スタンプ印

切手　五円

消印　藤沢　30・3・17

〔受信〕富山市安野屋町高志人社／翁久允様

〔発信〕神奈川縣藤澤市辻堂／川田順

〔本文〕

玉葉及高志人忝く
日本海も春色
漸深からん
と思ひやります　〔淡彩梅図〕　三月十七日
一度又錦地へと　順
御誘ひ難有存じますが、
今のところなかく
遠出ができません

『高志人』受け取りの礼状。「一度又錦地へとお誘ひ難有存じますが、今のところなかなか遠出ができません」と、富山訪問は難しいと返信する。川田自筆の梅の彩色画が添えられている。

## 17　川田順　翁久允宛葉書「高志人四月号忝く拝受」（昭和三十七年四月八日消印）

郵便はがき　墨筆・ペン書き

切手　五円

消印　藤沢　37・4・8

〔受信〕富山市安野屋町／翁久允様

〔発信〕藤沢市辻堂／川田順

〔本文〕

高志人四月号忝く拝受
第十四回の三尊道舎祭を
遥拝む仕ります
三尊に帰依の仏心持たずして
われは　翁になりにけるかな
釈迦誕生会の日
川田順　八十一聞

『高志人』受け取りの礼状。「第十回の三尊道舎祭を遥拝仕ります」とあり、「三尊に帰依の仏心持たずしてわれは翁になりにけるかな　釈迦誕生会の日」と短歌を記している。翁久允は、昭和二十五年十二月に、住居と活動の拠点として安野屋町に建設中の三尊堂に転居した。昭和二十七年四月、宗教法人三尊道舎設立を『高志人』誌上において発表、毎年四月八日に三尊道舎祭を開催した。

## 18　川田順　翁久允宛葉書「玉葉拝受　贈られし」（昭和三十七年四月二十四日消印）

郵便はがき　墨筆・ペン書き

切手　五円

消印　藤沢　37・4・24

〔受信〕富山市安野屋町／翁久允様

〔発信〕藤沢市辻堂／川田順

〔本文〕

玉葉拝受

贈られし　神通川の

鱒ずしは、夫婦の腹にも、

友の腹にも、

すでに数人で舌鼓を打ちました

乍延引御礼まで　4／23　順

第十回三尊道舎祭と同月の日付。翁から贈られた鱒ずしの礼状。短歌で感謝の気持ちを記している。